
極彩色の花達

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極彩色の花達

【Nコード】

N9582M

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

小阪亮治は何故か派手な色合いの花が好きだった。それがどうしてなのか考えているうちにわかったことは。ブレンパワードのEDの映像がヒントになった作品です。

第一章

極彩色の花達

小阪亮治は背はあまり高くはない。おおそ一七三程度である。茶色にした髪に黒く太い眉がよく映えている。顔は面長で頬が痩せている。目は横に長い一重で鼻が高い。その彼は学校ではサッカー部に所属している。

サッカー選手としての彼も学生としての彼も評判であった。ひょうきんなムードメーカーである。だがその彼には一つ変わった趣味があった。

「あれ、またかよ」

「また買うのかよ」

「ああ、またな」

花屋の前を通りその中にある花を見てだ。そのうえで一緒に下校する同じサッカー部員の面々に対して言うのである。

「ちょっと行って来る」

「またか」

「御前本当に好きだな」

友人達はそんな彼を見て首を少しだけ捻っていた。

「花好きだよな」

「しかもな」

彼等の言葉が続く。それに止まらないというのだ。

「その花がだ」

「どれも変わってるよな」

「それで今度は何を買うんだ？」

「一体どんな花なんだ？」

「あれな」

店の中を指差しての言葉だ。するとそこにあったのは。

赤と黄色の、しかもかなり変わった形の花だった。その花を指差

して言ったのである。

「あれ買おうかって思ってるんだけれどな」

「あの花か」

「また派手だな」

「あんな花何処にあるんだ？」

皆その派手派手しい花を見ながら言う。

「どっかの南の島か？」

「よくあんな花があるな」

「そうだよな」

「あの花買うな」

だが亮治はこう言うのである。

「ここはな」

「それでも買うのか」

「あの花をか」

「ああ、買う」

実際にそうするというのである。

「じゃあ行つて来るな」

「ああ、じゃあな」

「待ってるからな」

そんな話をしながら彼等は待つ。亮治は店の中に入り暫くして戻つて来た。その手にはその派手派手しい花があった。

「こうして近くで見ると余計にな」

「ああ、派手だな」

「何か人間でも虫でも食いそうな感じだな」

「ウツボカズラだよな」

その花が何かも知っている亮治だった。

「それは持ってないけれどな」

「興味があるのは花だけか」

「花以外は買わないのか」

「嫌いじゃないけれどな」

それでもだというのである。

「それでもやっぱり買うのはな」

「花か」

「それなんだな」

「ああ。花だ」

また言う亮治だった。

「俺が買うのはやっぱりな。花だ」

「しかもそうした花ばかりだよな」

「派手な花ばかりだな」

「目がちかちかするみたいだな」

「こうした花見てると落ち着くんだよ」

これが亮治の言葉だった。

「それも周りを囲まれていたらな」

「余計にいいのか」

「じゃあ御前の部屋はやっぱり」

「そういう花でか」

「ああ、一杯にしているさ」

まさにそうしているというのである。

「それが一番落ち着くからな」

「何か凄いことになってるんだな」

「部屋がそんな花ばかりか」

「物凄くないか？」

「それでもそれが一番落ち着くんだよ」

彼にしてみればそうだというのである。笑ってこう言うのである。

「俺もどうしてかよくわからないけれどな」

「それがわからないけれどな」

「それでもなのかよ」

「そうした花に囲まれてか」

「そうなんだよな。じゃあ俺これからな」

その鉢にある花を大事に抱えながら家に帰るのだった。そして家

に帰るとだ。

第二章

母親の声がしてきた。すぐにこう言ってきた。

「おかえり」

「ああ、おかえり」

「晩御飯もうすぐだからね」

すぐに夕食の話をしてきたのだった。

「ちょっと待っててね」

「ああ。じゃあその間に」

亮治は玄関から出てそのうえで階段を昇りながら応える。

「花置いていくから」

「えっ、またお花買ったの」

「悪いかな？」

「別にそうは言っていないけれど」

しかしというのは言葉に滲み出ていた。

「けれどそれでも」 6

「俺の部屋に置いて俺が世話するから」

「わかったわ。それにしてもね」

母の言葉は続く。

「あんた本当にお花好きよね」

「ああ」

「しかも派手なお花ばかり」

このことも言うのだった。

「好きよね」

「じゃあ置いておくからな」

「そうしてくれ。じゃあな」

「ええ、置いておいてね」

そんな話をしてから二階にあがりそのうえで自分の部屋に入る。そこは何処もかしこも赤や黄色の派手な花ばかりが置かれている。

その形も独特でありまさに異形の花々であった。

今自分が持っている花を置いてからだ。一旦ベッドの上に寝転がった。そのベッドの周りも花達に囲まれている。その赤や黄色も実に派手な色だ。

その花の中に囲まれた亮治はほっとした顔になる。そしてそのうえで言うのだった。

「やっぱり落ち着くよな」

こう言ってほっと一息つくのだった。そうした日々を送っていた。その彼はとにかくそうした花を見ればすぐに買った。そして彼はやがて花屋でのアルバイトもはじめることにしたのであった。

「えっ、じゃああれか」

「花に囲まれないからか」

「それでなんだな」

「あと金が必要になった」

こう自分の教室でクラスメイト達に話すのだった。

「あまりにも買い過ぎたしな。肥料も必要だしな」

「それでか」

「それで金が必要なのか」

「ああ、それでだ」

まさにそうだと話す彼だった。

「それにやっぱりな」

「とにかく花に囲まれないのか」

「ああした派手な花にか」

「落ち着く」

このこともここでも言うのだった。

「だからだ。是非な」

「それがわからないんだよな」

「そうだよな」

「何でなんだ？」

ここで友人達は首を傾げながら述べていく。

「何でそんな花ばかり集めるんだか」

「しかも囲まれてな」

「それが落ち着くんだな」

「そうだ、落ち着く」

彼ははつきりと言い切った。

「だからバイトもはじめる」

「じゃあ部活はどうするんだ？」

「そっちはどうするんだ？」

「当然そちらも続ける」

辞めるということはしないというのだった。

「両方やる」

「まあ頑張れ」

「それじゃあな」

こうして彼はその花屋でのアルバイトもはじめたのだった。彼は実際に花屋で派手な花達に囲まれて満足していた。いつも穏やかな笑みを浮かべて働いていた。

第三章

その彼にだ。店長の娘の小さな女の子が声をかけてきた。伊藤未来という。目は少し離れているが非常にはつきりとした目であり色は雪の様に白い唇は薄く淡いピンク色である。顔全体が非常に整っており黒いロングヘアが似合っている。小柄でスリムな身体をしている。その彼女も一緒に働いていた。

未来はいつもジーンズにエプロン姿だ。歳は亮治より一つ下で別の高校に通っている。よく彼に親しげに声をかけてくるのであった。

「ねえ、亮治さんってさ」

「何だ？」

「お花好きよね」

このことを問うのだった。

「それもかなり」

「大好きだ」

まさにそうだというのだった。

「こうして囲まれているだけで幸せになる」

「そうなの」

「どうしてかはわからない」

それはだというのである。

「だが。落ち着く」

「そうなの。落ち着くの」

「そうだ。こうした花が好きだ」

「まあ趣味とか好みは人それぞれだからね」

それについては言わない未来だった。しかしだった。

「それでもね」

「それでも？」

「何でなんだろうね」

未来はその理由について思うのだった。

「確かにお花に囲まれてると落ち着くけれどね」

「何故だろうな」

「それがわからないのよ。ただ」

「ただ？」

「原因や理由があるのは間違いないわ」

それはだというのである。

「それはどうしてかしらね」

「さてな。ただ」

「ただ？」

「生まれる前からここにいる気がする」

亮治はこう言うのだった。

「こうした場所にだ」

「生まれる前からね」

「そうじゃないか」

「言われてみればそうね」

未来も彼のその言葉に頷く。

「まあそのうちわかるかしら」

「そのうちか」

「今考えてもわからないのならそのうちわかるでしょ」

いささか能天気話すのであった。

「それでいいじゃない」

「随分適当だな」

「こういうことは適当でいいのよ。商売はしっかりじゃないといけないけれど」 「そうだな。商売はな」

「じゃあ真面目にやるわよ」

「ああ」

こんな話をしてから仕事を再開する。彼は未来と共に花に囲まれて満足していた。そうしたある日のことだった。不意に店にある客が来た。

それは落ち着いた雰囲気紳士だった。その彼が店に来てある花

を買った。それは一輪の大きな蘭だった。それを買ったのである。

「いや、いい蘭ですね」

買ってからの言葉だった。

「これは」

「いいですか」

「ああ、とてもいいですね」

温和な笑顔で亮治に答えもした。

「じゃあまた来ます」

「またですか」

「いいお花が多い店ですから」

その花の中を見回しての言葉だった。紳士は店の中に咲き誇るその花を見てだ。彼も満足していた。

「また」

「はい、また」

「いらして下さい」

亮治だけでなく未来も挨拶をした。そのうえで別れる。そして暫くしてからその客がまた来た。彼はその日も蘭を買うのであった。

第四章

暫くしてまた来て買う。それを何度か繰り返すうちに二人と紳士は顔見知りになった。やがて店の中で楽しく談笑するようになった。ここで未来がふと言ったのだった。

「ここにいます」

「います？」

「どうなのですか？」

「落ち着きますね」

こう亮治と紳士に話すのだった。

「とてもね」

「それは何故ですか？」

紳士がそれに問うた。

「お花に囲まれてるからでしょうか」

「はい、だからです」

まさにその通りだと答えたのだった。

「それで」

「ああ、それはですね」

ここで紳士は言ってきた。

「覚えているからですよ」

「覚えているからですか」

「そう、だからなのですよ」

こう言ってきたのである。

「覚えているからです」

「覚えているからって」

「一体何を」

亮治だけでなく未来もそれに問う。

「それがよくわからないんですけれど」

「何を覚えているんですか？」

「中にいた時のことをです」

紳士はにこりと笑って二人に言ってきたのだった。

「その時のことをです」

「中!？」

「中っていいますと」

「人は最初何処にいますか？」

紳士は二人にここから話してきた。

「最初は何処に」

「!？」

「何処につて」

それを言われても首を傾げるばかりの二人だった。

「ええと、それは」

「何処なんでしょうか」

「ですから。生まれる時です」

話しはそこに及んだ。

「生まれる時は何処にいますか？」

「ええと、それは」

「やっぱり」

そう言われるとだった。二人も答えることができた。そしてそこは。

「お腹の中です」

「お母さんの」

「そうですね。そこですね」

「ええ、そうです」

「そこですけど」

「その記憶なのです」

そうだと話すのであった。

「その記憶が残っているからなのです」

「お腹の中の記憶がですか」

「あるからなんですか？」

「これは無意識の中で覚えているものでして」

紳士の話は続く。

「お母さんのお腹の中にいた時。赤ちゃんはずっと夢を見ています」

「夢をなんですか」

「寝ているその間に」

「そうです。夢を見ていました」

「まさかその夢の中で見ているのは」

「その」

「そうです。お花なのです」

まさにそれだというのだった。紳士の言葉ではだ。

「こうした派手で美しい花達に囲まれている夢を見ると言われています」

「じゃあ俺はそれを覚えているから」

ここで亮治は完全にわかったのだった。

第五章

「そのせいでお花を」

「そうです。貴方はそれが特に強いようで」

「その結果として」

「はい、そうです」

まさにそうだというのだった。

「それでなのです」

「私もそうなのね」

そして未来もわかったのだった。

「それでお花が好きで」

「そうです。花を嫌いな人はいませんが」

「そういう記憶があるから」

「それでなのですか」

「はい。私はそう考えています」

そしてだ。ここで紳士は言ってきた。

「実は私はですね」

「私は？」

「どうなのですか？」

「医者でして」

ここで自分のことも話すのだった。これは二人にとっては今はじめて知ることだった。しかし今はそのことをこれまでの話から素直に聞くことができた。

「しかも産婦人科でして」

「ああ、それでなんですか」

「こうしたことを」

「はい、研究してしまして」

医学の追求者だからこそだというのだ。

「それでなのです」

「そうだったのですか」

「成程」

「確かにいいものですね」

医者は今度は周囲を見回していた。その周囲には様々な色の花が咲き誇っている。そうした花々を見ながらの言葉であった。

「こうして花達に囲まれているのは」

「落ち着くのはそういう理由だったんですね」

「お母さんのお腹の中にいた記憶で」

「そうです。人が落ち着くようになるのにも理由があります」

医者が言うのと実に絵になる言葉だった。

「ですから」

「ううん、何かお話を聞くと」

「そういうことだったんですね」

亮治も未来もあらためて唸った。

「いや、そうした理由があったなんて」

「夢にも思いませんでした」

「ですが夢の記憶です」

紳士はにこやかに笑ってその夢のことだと話すのだった。

「ですから」

「はい、それでですけれど」

「あの、いいですか？」

「はい？」

紳士はここで二人の言葉に目を向けた。

「宜しかったら」

「今はお客さんもしませんし」

店の中にいるのは三人だけだ。だからそれぞれ椅子を出してそこに座って話をしていたのだ。そしてここで亮治と未来が言ってきたのだ。

「いいですか？」

「コーヒーでも」

「コーヒーですか」

「紅茶もありますけれど」

「どっちが」

「いえ、それは」

ここでは断る紳士であった。

「もう缶コーヒーを持っています」

「えっ、そうなんですか」

「もう持ってたんですか」

「はい」

その通りだと言って頷く。頷きながらそのうえで実際に自分が持っているその黒い鞆から缶コーヒーを出してきた。そしてまた言うのだった。

「ですからお気遣いなく」

「そうですか」

「じゃあ私達も」

二人も缶コーヒーを出して来た。紳士に合わせたのは一目瞭然だった。

「これで」

「飲みながらお話ししましょう」

こう話してだった。三人でそのコーヒーをそれぞれ飲みはじめる。その中でだ。また言ってきた紳士だった。

「それでなのですが」

「はい」

「それで」

「またこのお店に来ていいのですか？」
こう二人に問うてきたのである。

「このお店にいると落ち着きますし」

「夢の記憶があるから」

「だからですね」

「そうです。ですから」

二人も笑顔で応える。紳士もそれに言う。

「いいですか？」

「はい、よかったら」

「宜しく御願います」

「有り難うございます。それでは」

三人は笑顔で言い合う。そうしてにこやかにその缶コーヒーを飲むのだった。花々はその三人を囲んでかぐわしい香りと美しい姿を見せていた。

極彩色の花達

完

2010・3・16

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9582m/>

極彩色の花達

2010年10月8日13時44分発行